広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第50号　2001　341－345

ロールシャッハ・テストと質問紙テストに関する一考察

―被検者の体験の観点から―

生　塩　詞　子

(2001年9月28日受理)

A Remark on Rorschach Test and Objective Test.
― From an aspect of examinee's experience ―

Oshio, Fumiko

Past research indicated low correlation between Rorshach test and objective test, such as MMPI. In this article, first, articles on the relationship between the Rorschach and MMPI were reviewd. Then, a factor, which derive low correlation in those tests, were examined with regard to examinee's experience. Conscious and preconscious were seemed to be concerned with those two tests, that led low correlation.

Key Words: the Rorschach test, objective test, consciousness,

1．はじめに

ロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テストと略記）の先行研究の大きな流れをみてみると、基礎的・実証的研究は1960年代後半から下火となっていたが、Exner（1991）の comprehensive system が普及してくると同時に、再び基礎的・実証的研究にも光が当たり始めた。その中でも臨床場面でよく用いられる質問紙テストである MMPI（Minnesota Multiphasic Inventory）や、MMPI から抽出された下位尺度（MAS；manifest anxiety scale など）などを用いて、ロ・テストにおける情緒性に対する検討や、診断における妥当性を検討する研究も多くなされてきた。しかし、その結果は、生塩（2000）の質問紙テストを情緒性の尺度として検討したそれまでの研究結果と同様、相関が得られても低いものであるというものであった。

2．ロ・テストと MMPI に関する先行研究

1946年から1990年までのロ・テストと MMPI に関する37論文をレビューした Archer & Krishnamurthy（1993）によると、1．はじめに、で述べたように、そのうちの13論文（35%）は1960年代に関心が集まった時期のものであった。また、73%の論文で有意差や相関がなかったこと、残る27%の論文ではピアソンの積率相関計数で、.24～.34の弱い相関が得られたことを示した。Archer らは、この論文の中で、これまでの研究において、以下のような問題点を示唆した。

①施行法・手続きに関して：MMPI においては、個別法であったり集団法であったりと一致していない、ロ・テストの施行法、スコアリング手続きも様々、

②対象者に関して：健常群である大学生から精神病群（入院患者、外来患者）、海軍予備兵、身体疾患リハビリ患者、法廷患者など様々であり、対象選択基準に対する妥当性についての吟味がなされていない、

③方法論に関して：統計処理の際に α・β エラーによって結果が歪んでいる可能性があること、

などである。また、上記した問題点のうち、①と③においては、以下の事が示唆された。

①両テストのシステムにおける変数の信頼性や妥当性に問題があり、両テストを直接的に比較検討する際に無効となっている恐れがある、

②反応数 R に関して基準を設ければ（Meyer, 1993）、被検者間デザインで研究されている方が相関が得られやすい、

③-1、統計的な力は、効果サイズが小さければ小さいほど、より厳しく基準が設定されており、統計力の小さな分析は、β エラーを高めるため、ネガ

ティブな結果を招きやすい。そのため、データ収集に先立って、被検者数の大きさの影響を予測し、潜在しうるαエラーの危険性や統計処理に耐えうるだけのサンプルサイズかどうかを計画する必要がある、

③-2、相関が得られた結果でも、αエラーから導かれた可能性がある。

レビューされた研究論文からは、ロ・テストとMMPIとの間に相関がないか、あっても低いものであるとされている。しかし、Archerらはこのような結果であっても、両テストに妥当性がないわけではないとしている。上記した研究における問題点や示唆から、Archerらは、結果の解釈が重要になってくること、および、より理論に基づいた仮説検討の必要性を提唱した。また、精神病理やパーソナリティの機能により、直接的に関連した諸テストの外的基準関連性（例えば、個人間の欲求やスタイル、衝動統制の問題、情緒障害、病理の重さ、治療レディネスや治療プログラムなど）を取り巻く基準が必要とされているとしている。

最近のMMPIとロ・テストに関する研究においては、ロ・テスト研究の動向について先述したように、診断や病態における妥当性についての研究がなされてきている。主な研究を表1に示した。1990年代に行われた研究においては、Archerら（1993）の諸問題について改善した研究がなされてきており、その診断や病態における妥当性については、比較的高い相関がえられてきている。

また、Meyer（1996）は“人格査定の分野では、いまだ各手法のバイアスや特異的な特徴が十分に吟味されてきていない”ことを指摘し、“両手法の限界とバイアスをまず知り、様々な外的現実に、どの手法が有効であるのかを知る”ことの重要性を提唱している。この点に関しては、Ganellen（1996）が診断の有効性について、MMPI、MMPI-2、ロ・テストの3つについての研究をレビューした研究があげられる。この論文では、抑うつ状態に関しては3つとも“sensitive”であるが、MMPI、MMPI-2はロ・テストほど“specific”に診断できない点、ロ・テストはMMPIやMMPI-2に比べ、より精神病的障害について“sensitive”であり“specific”であると示唆された。

このように、MMPIとロ・テスト双方のテストの特徴や特性について吟味されてきている中、複雑なパーソナリティを理解するため、最近では、臨床的によく用いられているMMPIとロ・テストの両者を比較検討し、その差異や妥当性のなさを強調するのではなく、両テストの限界や質を考慮しつつ多面的にとらえ、両者の結果を統合して解釈・アセスメントしようという流れもある（Acklin, 1993；Meyer, 1997）。

3．目的

これまでの研究において、診断という外的基準に関して、MMPIとロ・テストそれぞれとの相関が高いという結果がえられてきているが、質問紙テストであるMMPIやself-repotなどから得られる結果とロ・テストとの間では、相関がないか、得られても低い相関しかえられてきていない。しかし、視点を変えれば、低いながらも相関が得られているという結果はどう解釈すればよいのだろうか。投影法であるロ・テストから得られる無意識的な面と、質問紙テストから得られる意識的な側面との間に、わずかながら重なりがあると考えうるが、その重なりとは一体どのようなものなのであろうか。両テストの特性や、被検者の体験様式を意識という観点から比較検討し、上記した両テストの重なり、すなわちこれまでの研究で得られてきている低い相関に関する解釈について吟味することを目的とする。

4．投影法と質問紙テストの特性について

一般にロ・テストに代表される投影法では被検者の無意識的側面が、またMMPIなどの質問紙では自己認知などの意識的側面が測定されるとされ、両テストは

表1．MMPIとロールシャッハ・テストの各指標と診断および病態に関する研究

著者（年代）	対象	変数		結果
		MMPI	ロ・テスト	
Archer & Gordon (1988)	青年期患者，非患者（134名）	6尺度（S） 2尺度（D）	分裂病指標 SCZI うつ病指標 DEPI	.76と.64の一致 一致傾向のみ
Perry, Viglione, & Braff (1992)	分裂病入院患者（26名）	6尺度 8尺度 9尺度	自己中心性指標 EII	.47（$p<.05$） .41（$p<.05$） .49（$p<.05$）
Meyer (1999)	精神病患者（87名）	2尺度（MMPI-2） 7尺度（MMPI-2） 8尺度（MMPI-2） 6尺度（MMPI-2）	うつ病指標 DEPI 自殺指標 S-Con うつ病指標 DEPI 自殺指標 S-Con 分裂病指標 SCZI 警戒心過剰指標 HVI	.42（$p<.001$） .50（$p<.001$） .62（$p<.001$） .67（$p<.001$） .54（$p<.001$） .45（$p<.001$）

対極に位置するものと考えられている。この意識—無意識の次元の違いにより、両テスト間の相関が得られないか、得られても低いという理解も可能である。しかし、このような一般的見解は果たして妥当なのであろうか。投影法と質問紙テストの特性について明確にしたい。

『心理臨床大辞典』(1992) によると、投影法は(1)与えられる刺激の非構造性またはあいまい性、(2)求められる反応の自由度が高いこと、および(3)人の内部状態を表すパーソナリティ要因を推測する手続きであること、の3点から定義されている。投影法の基礎仮定としては、"被検者当人が気づかない面についても情報をもたらす可能性"や"よりあいまいな刺激を用いる技法ほど、より深いレベルの情報が求められる"などがある。

また、馬場 (1997) によると、投影法とは"本人が十分自覚せずに表現しているものの中からその人らしさを見出して、その人物像 (個性や偏りや病理を含む) を理解しようとする方法"であり"広い意味でのイメージやイメージ形成活動 (想像活動、想像力) を利用した方法"であるとされている。この"空想やイメージを用いることの利点"として"被検者の内面にあるものを、より自由に浮かび上がらせることができるし、ある面を意識的に隠したり、見せかけの自分を意図的に作り出したりする余地を、なるべく少なくすることができる"ことや、"本人があまり自覚していないような心的領域 (前意識や無意識) にあるものが表現されやすい"としている。

投影という概念はFreud,Sが提唱した精神分析における防衛機制の一つであるが、投影法における投影とは"非構造的刺激状況におかれた被検者が、みずからの欲求、感情、態度等を反応の中に表し出す過程"であり、"必ずしも無意識の欲求や受け入れがたい感情だけがあらわにされるという含みはなく、われわれが通常行っている認知活動、表出運動などに含まれる過程"とされている (『心理臨床大辞典』、1992)。すなわち、馬場 (1997) が利点としてあげている"本人が自覚されにくい心的領域"である前意識や無意識が表現されやすいとはいえ、認知活動や表出運動など、意識可能な面も反映されているといえる。

一方、質問紙法は『心理臨床大辞典』(1992) によると、"問題としている事がらに関する一連の質問を、回答者に指事どおり答えさせるようにして印刷された用紙を質問紙 questionnaire といい、これを使用して特定個人を診断したり、特定集団あるいは人間の行動を理解する方法"とされている。

質問紙法の長所としては、"実施者の影響が一般的にないことや、多数の回答者から比較可能な資料の収集ができること、回答者に匿名感があること"などがあげられる。また短所としては"質問項目や回答形式があらかじめ決められているために、個々の回答者の条件に柔軟に対応できないこと、回答者の自己報告法に依存しているため、回答者が意識的あるいは無意識的に回答を歪める可能性が高いこと"などがあげられる。質問紙法による研究で頻繁におきる問題として、"反応のバイアス"と"無回答"の2つがあげられている。"回答者は自我を傷つけられるような質問への回答を避けたり、自分自身をよくみせようとする"ためである。これらの諸問題は、質問自体が言語を媒体としており、被検者の意識に直接働きかけ、自我関与が容易で、防衛機制が働きやすいためであろうと考えられる。

5. 意識・前意識と無意識について

前節において、"意識"や"前意識"、"無意識"といった用語を用いてきたが、ここで本論におけるこの3つの用語の定義をしておきたい。この3つはFreud,S.の局所論的概念であるが、本論では小此木・馬場 (1989) を参考にし、"意識"を"直接的で確実な知覚に基づいた経験"、"前意識"を"本人が意識しようとすればいつでも意識可能な無意識"、"無意識"を"本人がいくら意識化しようとしても、意識化できないような無意識"と定義する。

6. ロ・テストの体験における意識

シャハテル (1975) は、その著書『ロールシャッハ・テストの体験的基礎』において、ロ・テストの反応生成過程が、いかに能動的で意識的なものをも含んでいるかということを、"投影仮説：知覚—連合仮説"を用いて説明している。ロ・テストにおいて、反応の最終段階には伝達というものがあり、被検者は言語的情報で検査者に解答をせねばならない。その際、"すべてとは言わないまでも、大部分のロールシャッハ反応の生成過程には、被検者が、自分の頭に浮かんだ概念が、テスト要請にかなっていて、検査者に伝達するのにふさわしい反応であるかどうかを意識的、選択的、批判的に判断する過程があり、この過程で、テスト状況やそこでの対人関係を意識的無意識的にどのように考え感じているかが特に重要な働きをする"としている。

一方、小此木ら (1989) も、ロ・テストの反応生成過程を"刺激—反応—表象形成—言語化"としており、この点ではシャハテルと同等の過程を想定しているが、"ロ・テスト反応では、かなり深層心理を反映しているように見える場合でも、それは前意識的な内容に終始している"としている。先に定義した"意識""前意

識”と照らし合わせてみると、“前意識”は“意識化可能な無意識”であり、小此木らは“無意識”的な反応であると言っているようにも考えられる。しかし、“ロ・テスト過程における心理的変化は、前意識的な内容の意識化を主とする”とも論じている。小此木らの“ロ・テスト過程における心的変化”は、シャハテル（1975）のいうところの“体験”と同義ととらえられ、上述した点を前景に出せば、やはり“意識”周辺で生じている反応であると解釈できよう。Freud,S. の意識と無意識に関する局所論に基づく図（小此木ら、1989）に、ロ・テストの反応生成過程を加えたものを図１に示す。

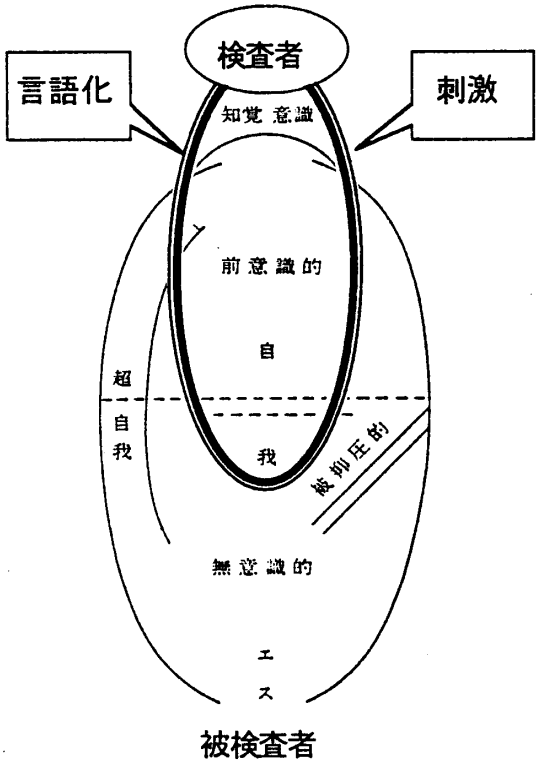

図１．ロ・テストの反応生成過程

ロ・テストでは見なれないインク・ブロットという視覚的な刺激が入ってくる。見なれない図柄だけに、ロ・テストは不安や葛藤状況を喚起する課題である。その葛藤状況から回避、対処するために防衛を用いたり、記憶と照合しつつ連想を繰り返し、“未知のものを既知のものに同化”（シャハテル、1975）させたりしながら、前意識の中にあるイメージを意識化し、言語を媒体として伝達する（馬場、1997；小此木ら、1989）。

このように、ロ・テストの反応生成過程においては“意識”が活性化されやすい状況に満ちていると考えられる。

7．ロ・テストと質問紙テストにおける“意識”

質問紙テストの特性について前述したように、質問紙テストでは言語が媒体として存在しており、常に自我が関与しやすい意識面に近い位置にあると思われる。その一方で、ロ・テストにおいては、前述した通り、“前意識”における体験が主となる。質問紙テストにおける、直接的に知覚しうる“意識”と、ロ・テストにおける“意識しようとすればいつでも意識可能な前意識”とでは、質的差異が存在するかもしれない。しかし、それだからこそ、これまでの研究において、質問紙テストとロ・テストとの間に低い相関しか得られなかったのではないだろうか。先行研究で得られてきた低い相関、すなわち質問紙テストとロ・テストとの僅かながらの重なりあっている部分は、“意識”と“前意識”に共通する“意識”ではないかと考えられる。Masling（1997）は、“投影法と質問紙テストの本質と有効性”について、“動機や合理的思考、ファンタジー、内省（力）、防衛など、それぞれのテストで違った角度からみることができる”としている。仮に、上述した“意識”が投影法と質問紙テストとの間で質的差異があっても、逆に“差異に注目”し、多元的に組み立て、理解できるのではないだろうか。

8．おわりに

質問紙テストの短所として“回答者の自己報告法に依存しているため、回答者が意識的あるいは無意識的に回答を歪める可能性が高い”点については、自我が関与するために防衛機制が働いているためではないかと上述した。この防衛機制については、ロ・テストにおいても得られる知見である（小此木ら、1989）。両テストの共通点として、防衛機制も考えられる。この点については、MMPI では下位尺度として、L、F、K 尺度で何らかの情報が得られると思われる。先にあげた Archer & Krishnamurthy（1993）のレビューにおいて、この３つの尺度とロ・テスト反応との間の相関に関しては結果が一致していない。しかし、臨床群を被検者にロ・テストと質問紙テストとの関連をみていく場合、被検者の自己認知が歪んでいる可能性が高いため、L、F、K といった尺度を用いて、質問紙テストへの回答の有効性を吟味しつつ、研究を行う必要があるように思われる。

引用文献

Acklin, M. W. 1993 Integrating the Rorschach and the MMPI in Clinical Assessment: Conceptual and Methodological Issues. *Journal of Personality Assessment,* **61(1).** 125-131.

Archer & Gordon 1988 MMPI and Rorschach indices of schizophrenic and depressive

diagnoses among adolescent.
Journal of Personality Assessment, **52(2).** 276-287.

Archer & Krishnamurthy 1993 A Review of MMPI and Rorschach Interrelationships in Adult Samples. *Journal of Personality Assessment,* **61(2).** 277-293.

馬場禮子　1997　心理療法と心理検査　日本評論社

Frank, G. 1976 On the validity of hypotheses derived from the Rorschach: I the relationship between color and affect. Perceptual and Motor Skills **43,** 441-427.

Frank, G. 1993 On the validity of hypotheses derived from the Rorschach: the relationship between color and affect, update 1992. *Psychological Reports* **73,** 12-14.

Ganellen, R.J. 1996 Comparing the Diagnostic Efficiency of the MMPI, MMPI-Ⅱ, and Rorschach: *A Review Journal of Personality Assessment,* **67(2),** 219-243.

Masling, J.M. 1997 On the Nature and Utility of Projective Tests and Objective Tests. *Journal of Personality Assessment,* **69(2).** 257-270.

Meyer、G. J. 1993 The impact of response Frequency on the Rorschach constellation indices and on their validity with diagnostic and MMPI-2 criteria. *Journal of Personality Assessment,* **60,** 153-180.

Meyer、G. J. 1996 The Rorschadh and MMPI : Toward a More Scientifically Differentiated Understanding of Cross- Method Assessment *Journal of Personality Assessment,* **67 (3),** 558-578.

Meyer、G. J. 1997 On the Integration of personality assessment methods: The Rorschach and MMPI. *Journal of Personality Assessment,* **68,** 297-330.

Meyer, G.J. 1999 The Convergent Validity of MMPI and Rorschach Scales : An Extension Using Profile Scores to Define Responses and Character Styles on Both Methods and a Reexamination of Simple Rorschach Response Frequency. *Journal of Personality Assessment,* **72(1),** 1-35.

小此木啓吾・馬場禮子　1989　新版　精神力動論　ロールシャッハ解釈と自我心理学の統合　金子書房

生塩　詞子　2000　ロールシャッハ・テストにおける色彩反応と情緒の関する研究の概観と展望、広島大学教育学部紀要　49、227 - 231.

Perry, Viglione, & Braff 1992 The ego impairment index and schizophrenia : A validation study. *Journal of Personality Assessment,* **59,** 165-175.

シャハテル、E.G.　空井健三・上芝功博（訳）　1975　ロールシャッハ・テストの体験的基礎　みすず書房（Schachtel, E.G. 1966 *Experimential Foundations Rorcha-ch's Test.* Basic Books, Inc., Publishers, New York）

氏原　博・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（共著）　1992　心理臨床大事典　培風館

（指導教官：一丸藤太郎）